

Title	ハサン・アルサンジャーニー, Hasan Arsanjani, Dah Maqale Peiramun-i Sosyalism-i Dimukratik, 民主社会主義に関する十の論文
Sub Title	Hasan Arsanjani, Dah Maqale Peiramun-i Sosyalism-i Dimukratik (Ten Articles on Democratic Socialism)
Author	宮田, 律(Miyata, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1988
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.58, No.1 (1988. 9) ,p.113- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19880900-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

ハサン・アルサンジャーニー Hasan Arsanjānī,

Dah Maqale Peirāmūni Sosyalism-i Dimukrātik (民主社会主義に関する十の論説)

宮田律

著者、ハサン・アルサンジャーニーは、一九六〇年代のイランにおける農地改革の原案を創出したが、その改革によってイラン現代史において特筆すべき人物となつた。彼は、その政治経歴を一九四一年八月の連合軍の進駐によるレザー・シャー Rezā Shah の退位直後に開始し、左翼系新聞ダーリヤ Dāriya (ダリウス) を創刊している。また、一九四六年に設立された民主党 Hizb-i Dimukrāt の創設者の一人でもあり、民主党は土地の分配、婦人参政権、失業の減少、灌漑の充実などを訴えた。このように、その経歴の初期の段階からアルサンジャーニーは、マルキシズムに基づく左翼運動に従事し、経済、社会、行政の改革を唱えたのである。

本書は、著者が農地改革に取り組んでいた一九六四年に出版された。その改革の理念は、決して急進的なものではなく、社会的、経済的な混乱を避けながら、大地主の所有地を收用し、新農民地主層へ配分するというものであった。アルサンジャーニーの政治、社会、経済改革に関する主要で、基本的な考えは、本書の中に明瞭に表現されている。さらに、当時のイランにおける様々な問題を解決しようとした彼の『穏健な』政治思想をその中に垣間見ることが出来るのである。

アルサンジャーニーは民主社会主義を採用し、一九六四年にロンドンで開催された国際民主社会主義大会に参加した西欧諸国の成功例を引用しながら、その説明を開

始する。その例証を行いながら、民主社会主義が多くの社会矛盾を解決する最善で、最も有効な方途である、と述べるのである。現在、民主社会主義の理論は、広く普及しているので、その概念をここで詳しく論ずるつもりはない。アルサンジャーニーの説明によれば、民主社会主義は議会制度の枠組の中で権力を獲得する政治イデオロギーである。それは社会正義を確立し、所有権や宗教などの個人の自由を尊重する。また、民主社会主義は私的大土地所有に反対し、大地主の政治、社会への影響力を排除しようとする。大地主による人々の権利の侵害を防ぎ、公益の促進のため、トラスト、カルテル、また大資本家の行き過ぎを抑制する。さらに中小の資本家を援助し、共同企業を設立する。これらの考えは、著者の農地改革を含むイランの近代化政策への基本的な姿勢を示し、農地改革自身の主要な特徴をも表しているのである。

著者は、発展途上国その後進性は国家の資本が極く一部の家族の所有の下にあるという事実に起因する、と述べる。これらの諸国では、総ての人々の福利や安寧を考慮した経済が確立されねばならないのである。こうした経済を構築する過程で強い抵抗が資本家から起きるであろう。

うが、このような現象は、少数の資本家グループが国家の資本を独占した西欧諸国で見られた、とアルサンジャーニーは語る。経済の寡頭支配と、大地主の専横を取り除くために、彼は自由主義経済から民主社会主義経済への移行を提唱するのである。

民主社会主義国家においては、政府は困難を回避せず、その責任から逃避したり、国民の福利を一部の資本家グループに委ねたりはしない。それどころか、困難に直面し、社会矛盾の解決を図るのである。さらに、そのような政府は生産性の向上のために国民に工場設立への投資を呼び掛ける。このように民主社会主義は国民の購買力を促進し、国家収入の増加を図り、またその収入の公平な分配を総ての国民の間に果たし、私的独占を廃することが出来るのである。それゆえ、アルサンジャーニーは民主社会主義が発展途上国において最も有効な救済策である、と語るのである。

一九二九年の経済恐慌の後、西欧諸国はその潰滅的な経済を必死になつて打開しようとした。イギリスでは政府が直接経済に介入し、資本を管理し、生産を調整したのである。イギリスは重要産業を国有化し、その植民地諸国に独立を与えた最初の国家であった。アルサンジャ

一一一によれば、自由放任経済の不足を補うためには、自由主義国家は社会主義的要素を取り入れ、民主社会主義に転換しなければならない。彼は、その原理は西側諸国だけでなく、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの国々にも当て嵌まり、これらの諸国の後進性を救済し、社会正義を確立する、と考えたのである。

アルサンジャーニーは、政府による経済活動の統制の重要性を繰り返し提唱する。彼は綿産業を例として用いる。その説明によれば、政府は生産性向上のために農民に貸し出し金を与えるか、収穫後に綿の価格を定め、それを農民から購入すべきである。この場合、もし政府が余剰の収益を上げれば、それは綿産業の発展にとって必要であり、有益である。このように著者は、発展途上国が成功するか、しないかは、いかに経済の新しい意味を考えるかに拠る、と述べる。再び、彼はこの新しい原理を民主社会主義と定義づけ、その政体の下では、生活水準が向上し、労働者と、農民の購買力が増大する、と主張するのである。

アルサンジャーニーは民主社会主義の「素晴らしさ」を訴え続ける。この制度の下では人々は国債を購入し、政府に生産施設の建設を可能にさせる。この施設は私的

な運営ではなく、政府の経営によるものであるから、不正な行為は、殆どない。政府は国民に国家事業への投資を促す。その結果、国民の貯蓄は増加し、また生産力も上昇するのである。

次に、アルサンジャーニーは民主社会主義を共産主義と、資本主義との関連において論ずる。二つの極端、左にマルキシズム、右に自由主義があり、その中庸の解決策が民主社会主義である、と彼は説く。自由主義制度の下では、政府による経済活動への介入はなく、政府も經濟的平等とか、社会正義を考慮に入れない。共産主義政権下においては、すなわち労働者の独裁の下では、農民は政府によって抑圧され、國家が総ての土地を所有する。資本主義は、その自由放任経済を放棄し、社会主義の要素を取り入れる。また、マルクスやレーニンが考え、著述したのは、彼らが当時直面せざるを得なかつた問題についてであり、その点で共産主義にも限界がある。それゆえ、新しく、複雑な政治、経済、社会的な要素を孕む今日的な問題には共産主義は適用出来ない。共産主義は、次第に資本主義的要素を取り入れ、民主社会主義に向けて前進するのである。

海、その他で存在する総ての物質が、国家の資本を構成する。有効にこれらの資源を利用出来るか、否かによつて先進国と発展途上国は区別される。発展途上国が経済的成功を達成出来ない理由は、自然資源の十分な活用を妨げる障害を除去する術を知らないからである。この根本的な原理が民主社会主義であり、民主社会主義を採用すれば、経済、社会の病弊を癒し、社会正義を確立することが出来る、とアルサンジャーニーは主張する。何故なら、民主社会主義は、人類が様々な社会矛盾を解決する過程で体験した試行錯誤の結果、生まれたからである。また、アルサンジャーニーは、民主社会主義は立憲君主政体であるイギリス、スウェーデンで有効に機能していることを指摘する。それゆえ、彼はイギリス、スウェーデンの成功例は、同じ政治形態であるイランにも適用出来、民主社会主義はイランの経済・社会を活性化する最も有効な手段である、と信じたのである。

題名の『民主社会主義に関する十の論文』が示す通り、本書は民主社会主義についての十の小論によつて構成されている。各論文は、「民主社会主義は、発展途上国の後進性を救う手段であるか」という質問によつて始められている。アルサンジャーニーの思想の根底には、

民主社会主義が最も実際的な政治形態を提供し、それゆえイラン社会にも適用すべきである、という考えがある。しかしながら、その論理の展開は説得力に欠けている。彼は民主社会主義を繰り返し説明するが、民主社会主義は資本主義の修正によつて社会主義の実現を図る制度である、と理解しているが、アルサンジャーニーは現在共産主義体制を取る諸国においても共産主義から民主社会主義への移行がある、と予想している。彼は、この予見に対する事実的根拠を提示していないし、実際にこの移行が起こつたいかなる事例をも指摘していないのである。

第三章には、「共産主義と資本主義に対抗して Dar Muqabel-i Komunizm u Kapitalizm」という表題が付けられているが、アルサンジャーニーは共産主義の特別な限界について言及していない。民主社会主義を論ずる時、資本主義の病弊を説明するのは容易である。それゆえ、民主社会主義が資本主義の欠陥に改革手段を与えることが出来る理由についての著者の説明は適切に行われており、比較的説得力がある。しかし、共産主義との関連で民主社会主義について述べる時、共産主義国家にと

つての民主社会主義の必然性は十分に説明されていない

し、また共産主義社会に存在する不備についても多くを語っていない。

民主社会主義は発展途上国の中成長を促す最も有効な手段である、とアルサンジャーニーは述べる。この説明もまた、具体的な証拠と論理的な説明を欠いており、確信させるに足る議論を行っていない。後進性は、その国の文盲、社会構造、宗教性などの様々で、複雑な要因によって生ずるのである。それゆえ、その性格はそれぞれの国によって違い、民主社会主義を同じ基準、同じ方法で総ての発展途上国に適用することは、不可能なのである。

著者は民主社会主義を粗雑な方法で記述し、その社会、経済に関する分析は洗練されたものではない。しかしながら、アルサンジャーニーがこの著書の中で主張しようとしていることは一九六〇年代の農地改革の性格の中に明瞭に現れている。それはイランを大地主が支配する後進的な農業国から産業資本家が支配する工業社会に転換する目的で計画された。要するに、農地改革は近代的な社会構造を創出することを目指した。それは、独立自営農民を誕生させ、彼らと国王との間に新しい結び付きを創り出し、この『糸』が農民の王政への批判を弱め

る筈であった。

それゆえ、本書は国王の近代化政策の基本的な性格を表しているのである。農地改革は大部分のイラン農民の自発的意志に基づかず、イランの「西欧化」を促進させた。著者は「西欧モデル」を無批判に受容し、受け入れ側のイラン国民の自発性に注意を払わなかつた。さらにアルサンジャーニーは「西欧化」がイランに現存する階級的な不一致を深めたという事実を考慮に入れなかつたのである。

(ビージャン社 *Intishārat-i Bīzān*、一九六四年八月刊、一一三頁)